

資料：「学校ボランティア通信」 No.1～No.14



学校ボランティア通信

創刊にあたって

教職課程教員 入江直子

神奈川大学
教職課程指導室

No.1

発行日 2006年 3月7日

教職課程を履修している学生たちや、卒業して小学校教員をめざして勉強している者たちが、小学校や中学校でボランティア活動をさせていただいている。とても貴重な経験になっていて、教職課程の教員として大変感謝している。現在は横浜市立の浅間台小学校・寺尾小学校でATとして、近隣の斎藤分小学校や栗田谷中学校で、そして横浜市教委の「パイオニア・スクール」の取り組みとしての松本中学校との関係で、また、大和市立鶴間中学校の相談室との関連で、などさまざまな学校でお世話になっている。これらの活動を通じて学生が感じたことをふり返り、お互いに共有することで、経験からより深く学ぶことを願って、そして私たち教員もそこから学びたいと願って、ささやかな「通信」を発行することにした。

創刊号は、今年度1年間にわたり、浅間台小・寺尾小でそれぞれ3名ずつ計6名活動させていただいた中から、3名の「4月からの教師たち」に1年間をふり返ってもらった。今後、活動をしている学生たちが率直な感想を出し合って、学びあえる“ひろば”として発行していきたいと考えているので、楽しみにしていただきたい。

ATの活動で得たこと

2003年度 経済学部貿易学科卒業 安藤淳也

横浜市西区にある浅間台小学校でアシスタントティーチャー(AT)として行きはじめて約1年が経った。最初はこんなにボランティアとして行き続けることが出来るとは思ってもしなかった。アルバイトを減らしてボランティアに行っていたため、毎月苦しい生活を強いられた。しかし、不思議と学校へ行くのを辞めようとは思えなかった。小学校教員になりたいから行かなければならないと考えていたわけでもなく、月、水曜は小学校に行くことが当たり前になっていたからであると思う。きっと小学校での生活がいろいろな刺激があって、自分にとって楽しいから行き続けることが出来たのであると思う。

ATをすることで得たものは、学校で子どもたちと触れ合うチャンスを得たことである。一緒に遊べるときはたくさん遊ぶことが大切だと思う。先生方は忙しくて、休み時間に一緒に過ごすこと

がむずかしい。子どもたちは余りあるエネルギーと欲求を発散する場として遊びで目一杯発散させることが必要ではないかと思う。もうひとつは、教師を目指す者として授業のアイデアや方法、先生方の子どもとの接し方や話し方、指導の仕方など一つ一つの技術が勉強になる。それだけでなく、教科によっては教壇に立たせてもらうこともできて、ボランティアながら貴重な経験をつむことができていたのも感謝すべきことである。

約1年で経験したことはさまざまある。ATとして子どもと関わって失敗したことも多くある。うまくいかないことの方がほとんどである。1年間経験しても、子どものとの関わりでは失敗の連続である。子どもは子どものなりに一生懸命考えて行動していることを理解でき、今の子どもの実態を把握できただけでもATの経験はプラスに変わらと思う。教員になる前に1年間ATという形で学校や

内容

- ・創刊にあたって
入江直子
- ・ATの活動で得たこと
安藤淳也
- ・ATの活動を通じて感じたこと
平野晃一
- ・ボランティアを通じて学んだこと
齊藤武

子どもに関わることができたことがプラスの経験になるのであろう。

これからはじめようと思う人、続けていこうと思う人へアドバイスがあるとすれば、ATで学ぶこと、得るものは自分の心がけ次第です。教えてもらうことよりも自分で試行錯誤して学ぶこと、得ることは自分に残ります。学ぼうとする態度を忘れず、一生懸命、全力で子どもたちと触れ合ってください。なにより一番大切なこと、継続は力なり。続けることだけでも何か見つけられると思います。続けたことは自信になって生きてくると思います。4月からは自分が赴任する学校にボランティアで来てください。

《安藤語録》

ATで学ぶこと、得るものは自分の心がけ次第！！自分で試行錯誤して学ぶこと、得ることは自分に残ります！！

ATの活動を通じて感じたこと

法学部自治行政学科4年 平野晃一

私はこの一年間、横浜市立寺尾小学校でアシスタントティーチャー(AT)ボランティアの活動をしてきました。教員採用試験に臨む前、そして来年度から教壇に立つ前に、教育実習に加えて実際の学校現場で経験を積むことができて非常に良かったと思っています。

はじめは先生方も私自身もATの立場や役割に戸惑いながら活動をしていました。児童との接し方や関わり方、先生方との連携などいろいろと模索しながらの活動でした。ただ、4月5月と夢中で取り組んだATの活動が教育実習や採用試験で生き、教育実習や採用試験で得

た自信がその後のATの活動に生きていていると思っています。

私はATの活動の中で、子ども達となるべく多く交流を持つように心がけました。昼休みや中休みはグラウンドに出て一緒に遊んだり、運動会や宿泊体験学習の行事に参加したりもしました。鉄棒や縄跳びを子どもた

《平野語録》

4月5月と夢中で取り組んだATの活動が教育実習や採用試験で生きた！！

ちと競いながら練習したりもしました。子どもたちはATの先生にとっても興味を持っています。こちらからキッカケをつくれればたくさん子どもたちと関わる事ができると思います。授業の支援だけでなく、子どもたちと一緒に遊ぶこともATにとっては大切な役割であり経験だと思っています。

寺尾小ではATがそれぞれ一学年ごとに担当する形をとっています。私は2年生を担当しましたが、個別支援学級で活動するこ

とももありました。私は特別支援教育に以前から興味を持っていたので、現場での活動を体験できたのは非常に良かったと思っています。

もちろんうまくいった経験ばかりではありません。失敗をして先生や子どもたちに迷惑をかけることは何度もありました。教室に担任・ATと2人の先生がいることは、児童に対して先生の目が行き届き手厚い支援が可能となる一方で、先生が2人いることで児童の注意が散漫になりやすく、特に担任の先生が全体指導



をしているときには、児童との関わり方に気を使わないと教室全体の雰囲気悪くしてしまいます。また、発達障害のある児童がパニックになっている場合は、その子どもの辛さも伝わってきますし、状況や状態に沿った指導や支援の難しさも感じています。

3月に入り私のATとしての活動も残りわずかとなりましたが、今でも失敗をする場合があります日々反省を繰り返しています。ボランティアとはいえ先生として児童と関わるということは様々な面で責任を伴うことも感じます。

それでもこの一年間、ATを続けることができたのは、「楽しい」という思いからです。子どもたちと一緒に勉強したり遊んだり、子どもたちからかわれたり、先生方

にいろいろなお話を伺ったり、振り返ってみると朝から放課後までほとんど休みなく動き回っていたような気がします。正直言えば家に帰ると疲れたなあと思うのですが、また行きたくなってしまうのです。

学校って楽しい、こどもたちの笑顔が見たい、先生って魅力的だ、私は先生になりたいんだ、と改めて実感することができました。

子どもたちと一緒に学校生活を送り、子どもたちとふれ合ったこと、先生方の活動や苦勞を間近で感じたことを私の財産として、これからの私の教員生活に必ず生かしていきたいと思っています。



ボランティアを通じて学んだこと

2004年度 法学部法律学科卒業 齊藤武

浅間台小学校へボランティアに行く前は、小学校に關しての知識は殆どなかったと言っていいと思う。去年の7月に入江先生からお話をいただき、8月に校長先生とお会いして、9月から低学年ブロック(1・2年、3クラス)でボランティアをさせていただくことになった。

浅間台小学校でのボランティアでは、勉強が遅れがちな子や、授業に集中できない子のサポート、先生方の印刷や教材づくりの手伝い、学校行事の参加などをさせてもらった。

ボランティアに行く前から教員採用試験は受験してお

り、小学校教員になるつもりでいたが、実際にどんなことをやるのか、今の子どもたちの実態はどうなっているのかなど、全く分からなかった。しかし、浅間台小学校ボランティアで実際の教育現場を体験することによって、小学校教員の仕事の一端を知ることができ、自身自身の適性の確認もし、また自分がこれから何をしな

《齊藤語録》

迷っているのであれば、とりあえず行って欲しい！！
子どものかかわりが教師にとって最も重要！！

ければならないかということが、少しずつ見えてきた。

浅間台小学校は地理的に特徴があり(景観がとても良い等)、校舎のつくりも変わっていて(校舎と校舎が離れている等)、子どもたちも私自身が小学生だった頃とは違うようである。

浅間台小学校で私が学んだ一番大きなものは、子どもたちとの触れ合いによって子どもたちを知り、私自身深く考えることができたということである。正直言って、浅間台小学校の低学年の子どもたちは、これから教員になろうという学生にとっては、いろんな意味でとても勉

強になる子どもだと思う。色んな子がいる。先生の言うことを聞かない子・大声を出して先生を呼び、甘える子・叱れば泣き、距離を置けば無視されたときまた泣く子・何でも率先して自分からやっていく子・もの静かだが深く考えている子。

ここでは教師の仕事の一部しか見ていないが、子どもたちとの関わりが教師にとって最も重要なものであると言

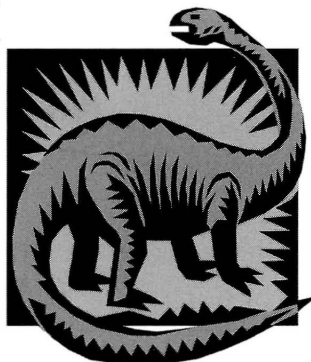


うことを強く感じた。上に挙げた子どもたちの状況は私の理解のしかたであって、これから行かれる方にとっては違うものかもしれないが、自分で自然に考えていくことに意義があると思う。迷っているのであれば、とりあえず行って欲しい。疲れたり、面倒になったりすることもあるかもしれないが、無駄な経験にはならない。特に教師になりたいと思うのであれば、行く機会があれば行った方がよい。

浅間台小学校以外にも、夏の水泳学習の補助員として齊藤分小学校、教育実習や実習が始まる前のボランティアとして川崎市立上丸子小学校にも行った。ここでも学校による違い、先生方による違い、子どもたちの実態の違いというものを知ることができた。実際に教師になったとき、自分がどのようなクラス、子どもたちを持つかは分からない。子どもたちは一人ひとり違う。色んな子を見ていくことは大切である。

最後に、私が悔いていることが一つある。それは、数十人の子どもたちに対して一斉に指導をするという経験をもてなかったことである。小学校ボランティアに限らず、複数の子どもたちを指導するボランティアや仕事も

あるだろう。そういうものも、積極的にやって行って欲しいと思う。



神奈川県立大学 教職課程指導室

電話：045 (481) 5661

(内線4228)

FAX：045 (413) 4154

Email: educ@kanagawa-u.ac.jp

今回は入江先生の提案で、学校ボランティア活動を新聞にしてみました。ボランティア通信の第一号はどうでしたか？このような形で、ボランティアを通じて感じた事、得た事を共有する事はとても大切なことだと思います。

今後も定期的に発行していきたいと思うのでご協力よろしくお願いします。最近ボランティア活動を始めたばかりの人は、色々楽しい事、苦勞している事があると思います。それを、たくさんの人々に知ってもらいましょう。

最近ボランティアを始めたばかりの一人

小野啓之